

▽非常時の意義

非常時と言ふ聲を喧しく聞かだしてから既に二、三年になる。一九三五年、三六年は日本の危機で日本は今、非常時局に直面してゐるのだと全く五月蠅程、八方で叫ばれて、日本を中心に世界戦争が今にも始まり相な不安が日本の全国土を覆つてゐるように云はれてゐる。

日本は一體、何處の國を對手に戦争をするのか。日本の戦争對手は甚だ不明瞭である。だが政府は軍需インフレーション政策を強行し、軍需工業を中心に重工業は活氣を帯び、軍備、國防の整備は國內一般の輿論となつて戦争準備が着々と行われてゐるやうに國民一般に思はせてゐる。

それは世界各國の資本主義經濟の必然的行詰りから、各國資本主義の國家主義的對立が益々激化して、經濟戦争から武力戦争へ轉化する危機を脱するため、戦争自體を目的にするのではなく、寧ろ次の世界平和を最も日本に有利に展開する軍備と國防の完備を圖つてゐるに外ならない。

第一、戦争がさう容易に起り得るか否か。戦争の可否に就いては世界各國の資本家地主の支配階級の方がより、深刻に考慮してゐる。次の戦争はこの前の世界戦争よりも數倍、數十倍も激烈、深刻で、今の國際的、社會的、經濟的情勢では戦争を中心に各國の支配權が移動する危険

が極めて濃厚であるから、戦争にはむしろ支配階級が最先きに反對である。だから戦争を假定にした國際的非常時ではあり得ない。

私共は寧ろ日本の非常時は國內的な非常時局であると考えてゐる。日本の非常時局も資本主義經濟機構の本質的缺陷から深刻なる社會問題となつて各方面へ露出してゐる。即ち、日本の非常時は共產主義の執拗な地下運動となり又フワッショとなつて炸裂してゐる。或時は政治上の陰謀となりて國內の不安は益々深刻化して行き且つ日本の國內經濟は資本階級の營利本位で我利、私慾追求專一の我儘故題の經營で國內産業は全く身動きが出来ない程の行き詰りから非常時局の深刻な一面を作つてゐる。

そうしてこの非常時の重壓と犠牲を一身に背

負わされてゐるのが日本の勞働階級である。近頃、軍事インフレで重工業界には相當に景氣が出てゐるやうであるが、軍需工業はその本質が不生産事業で、ある程度——即ちロンドン條約、ワシントン條約で規定された制限に達した時、又は確實に戦争の不安が解消した時に達したなら、必ず行き詰りが来る。政府は國內の生産事業を悉く犠牲にし、公債を發行して借金で軍需工業の中に無理矢理に作り出した借金景氣であるから、こんな軍事インフレ景氣に永續性がある筈はない。

この軍事インフレの景氣はこゝ二、三年以上は斷じて續くものではない。明年の末頃、おそくとも、明後年の末までには軍事インフレの行き詰りから「不景氣襲來」の事實が輿論となつ